枕草子抄

八

いやしげなる物
しきぶのぞうのしやく　くろきかみのすぢを（屏風ハ布にてはりて絵をかきたる物）
ぢわろき　ぬのびやうぶのあたらしき。ふ
るくろみたるは　さるいふかひなき物にて（是ハ向平けたるは咎もなきと）
中々何ともみえず。あたらしうしたてゝ（是も布屏風のこと）
さくらの花おほくさかせて　ごふん（胡粉）しゆさ（朱砂）（絵のさま）
などいろどりたるゑどもかきたる　やり戸
づし（厨子）。ばしはともぬるのそいやしきなり
むしろだちの車のおそひ　けびゐしの
きぬ　いよすだれ（伊予簾）のすぢふとき　人の子に
ほうしこのふとりたる　まことのいづも（出雲莚ハその土産なり　延喜式民部にあり）
むしろのたゝみ

しきぶのぞうのしやく
式部丞爵（シキブノゾウノシヤク）百寮訓要ニ
云式部丞ハ六位下なりとの
給之く。式部丞と民部
丞ハ二省の丞とて必
爵ともうすなり
にゆへ式部丞必叙爵を
とくなれど。ゆへ六位なれど尉
殺なるなれ賤きなや
むしろだちの車これなりといひ
莚をかけたる車なりとも
西宮記云天禄四年十一
月八日女御懐子於東河
有除服其儀御挟柳
毛車其上張莚懸鈍
色簾并下簾鞦等
御祓之後取張莚垂
替簾等即以御
けびゐしのきぬ　そしハかど
検非違使のきぬ　督の
時のすゑやこ給ハ

環翠軒云看督長として
別當乃召次なと云者也
赤き狩衣に白き布
袴を着て白杖を持
て罪人等追捕する事を
以て出立をやしけるとや
おやすよの心ちしう
昔乃人心も胸ぼそや
伊勢物語などにみゆると
てはえ作わざをまきそ
それにすでに不吉を云
小学云文王有疾武王不脱冠帯而養文王一飯亦一飯文王再飯亦再飯
飯こそそのゑをましし
人まのそのうへあらずし
それ例の不平ならぬ人の我かれ王をたとす
るまむかしつるを

むねはやするしな
くらべる人も ととのひよる おやすよの
心ちおしうきこえれいならぬさきまする
ますて世の中すてじちもじきち よろづの
事わすれど 又あつてねちごれする人
て気もの出ずいらじくもの これいでく
ももやまでひさしうちかきしてる れ乃
ねずかくごともまいちちるうねへの
ころきてつけるにとそうへぞのころ
うちなどにふやまごころはやれにつく
みなき人乃きてもしいくころはれ
よくきこる人乃けさみ又乃なうきや

うはしき物
めぐみあられむに
む為麗乃心は
かりうきたる
姫氏乃するもや
へよるとはなく
雀子もてしく紅
粉をつけしみや

いとちいさきちりまてを
白氏文集十の観児戯
詩に齠齔七八歳
綺紈三四児
弄塵復鬪草 盡日樂嬉嬉
嬉々下略

人さへはずる 荷ふひよの中にもちてしは
出さるも又はずる
うはしきもの
かりかきさるちこ乃かすずめ
子乃ねずみなきするおどりくるまる
べくなどはらくすへされはおやすずめ
乃出などもてきらくてむるをいと
らうし 心ちたるちこのい
るきそてもひくるなすいとちいさき
ちりなとの目をさとめるもちより
見はんくいとをかしげなるおよひ
にとらへておとなこなどにみせる

まことさかげまゆひたる
くしの
そも兒乃さかやきをせ
源氏物語にもすだ
ひめぎみ乃さかすきかり
ゆひあぐるむねつきさう
うつくしげさうしそへ
えあてるこ和秘抄にむ
くハおさなき人小袖を
いきずてすきと子
袖をきるとされ秘訣
あり
殿上わらハ　童殿上と
て元服以前の昇
殿をするなし

あたまハあまそぎなる兒(ちご)
乃目に髪乃おほへるをかきハやらで。
うちかたぶきて物など見たるもうつく
しすきがけにゆひたるこしのうへの志
ろげなるも見ゆるもうつくし
おほきにハあらぬ殿上わらハ乃さうぞ
きたてられてあるくもうつくし　おか
しげなるちご乃あからさまにいだきて
うつくしむほどにかいつきてね入るも
らうたし　ひゝな乃でうど　はちすの
うき葉乃いとちいさきを池よりとり
あげたる　あふひ乃ちいさきも

八九十ばかりやがてその
ときハおとなしく
皇子ハ七歳にて読書
はじめの儀桐壺の巻を
かりぬ。八歳より
よぶ小学に入て灑掃
應對書数を習ふ
事礼記にあり
人乃志りきもく
伊勢物語にも古りて
といゆけどかり後乃
蠶なるもよし
かりのこ　鴨子西宮記にみえたり

いとうつくしなにもなにもちいさき物ハいと
うつくし　いみじうこえたる兒(ちご)乃二つ
ばかりなるが志ろううつくしきが二あゐ
うすものなどきぬながにてたすき
ゆひたるがはひ出たるもいとうつくし
やつ九つ十ばかりなるおのこゞのこゑハおさな
げにてふみよみたるいとうつくし　鶏(にはとり)
乃ひなの足だかに志ろうおかしげに
きぬみじかなるさまにてひよひよとかし
かましうなきて人乃志りにたち
てあるくもいとおかし又おや乃ともにつれだ
ちてはしるもみなうつくし　かりのこ

はりまのつや　玻瓈　はりや
はりとは又すき通るとぞ
貨源云玻瓈ハ水玉也或云
千年ノ氷化為之ト
人ざくらる物　人うつくと
世にうつる也　人映ヲ云

おやわくぶちて　文鑒
ほうぶちわきてる也り
せうとはりふるをさてそ
するさ也
ひきそられ
すひきいられハ川をわる　川　張れ也
れ也し
歌のよする所えて
こちらを見ると父の
きてうりわらりる
さ也

はりまのつが　なでしこのはな
人ざくらとらの
ことある事らさき人の子なるらしくちる　いとしくさかえれ也
えされる　ちりぶきさし川りしき人子物　鞦韆ニ鞦ハ半　嗤日
いそんとする身もまけ　さとさまろ　ある　せいうのひらゆや
こちらすむ人の子ども四つみつまる
いおやわくぶちて。物すでえちうしてゐと
あやまとはねをひきちれすでせいせられ　いつれ　制し
て父の事いにもえ行しぬが。親の事する　おや
ちえてゆうらわりる物を。おれ刀へせいや　ちえれりく云しかをとこ　そまの須也
ちまなく川ゆるがすふ。おうるのござ物いふ　母の人を抱ひてきつれ也
とそやきいれねばくるつうりさかし　まのさ也

すきうつぶり
三すんにさうなと父の
ゐすしすでにいろもひそ
を物とよりもかくさねし
われえらしさあくをいそ
歌もさまでちうれと他
人ハれつらくもさうで
ゐそうとられてゑぬる也
おそぶち　きそぶち
する例をるべし
いかづち　穀梁傳云陰陽相薄感而為雷ト
ゐくも　不崇雲丸
公羊傳云觸石而起膚寸而合不崇朝而雨者唯泰山雲乎
又不祥雲ゐや。母のさ
とをでにおるやし
ふすまる　宋朝ニ述伯記
よ物ぞの　つまり　蝙蝠

そびえるこうひとみくられなれをなまさいと　ゆかし
むらうちひとくどちかくさでほうせう
うこまをとむりわえそていふおやしまく
しかれえちしさまくものでるうこち
ここをまそれ
名たかうきし物
鶺鴒　家の名も
あをぶち　谷のうし　ちるさ　くろが
ねはいかれ　土塊し
いかづちハ名のみあらずはらう
おうろ　風の名也和名ニ暴風ハヤチ　はやち　ゆらくを　ゐこぶ　さいとうり　牽牛也
おかみ　牛ハ佐月生三ハさめ生し　うしハさめ　蝿ハや　篭長丸四獄正を　らうのおきふ
すぷれ也名のけあらずみてもわろし　ゐうや
そ　縄莚　むしろ　強盗　がうそうゑまばよれろし

鮨ことわて。蝙蝠見せん
和名抄。鳥具鎧。野干。大者也。とそうやまの助字

ひぢかさる　地楊梅
ちちやそうこ　いさごとる
愚薊
ふどそろ　をふわうび　茨　択穀
牡丹
牛頭馬頭の
むくろ　ぢうん　うをふ

いもずみ　梁塵愚案抄
云俗ようもうの丸薬を
ちりぬるぢうの神を
いさごとる　河海云　窮鬼。西宮記　発花云。生霊也。又ぢ霊也
いもずみ　英房。草と英房。炭とも

奥よりすまいたこすとあり
ふことあることあきの掛れをしら

いちこ　霍盆子
うちみ
はいしき　野分
うきき　英賢

胡桃
あづきくるみ　うん

いちご　覆盆子
ぢやうち

本草云英賢。英蕊三月生
葉貼水大千荷葉面青
背紫茎葉皆有刺
うんじやうちせ

全左宮乃権大夫　やまとし

文章博士　史書詩文ぞ
よむ人也。令義解云。文章博士従五位下。弘仁二年定。
皇后宮権大夫　殘原抄云。華族納言条議及三位以上兼之。中宮大夫八左宮
乃内を兼ねすまし。権大夫八大夫のごとくはあるねどあるまるべきなり

虎杖　黎
小伊太止豆。虎の名あり
本草疏云。
むつけうる　むをく
ちげうる　ぬひもの
ぬひもの　繡乃縫の
うしも。和名抄。蔣魏切韻
云繡以五色絲刺万物
形狀也
かんきぬ　狐腰衆貼
衆乃ぢひ　衆乃東
付ぬ。衣の縫目ぬて
むしくしきこと
乃色乃不ぬ
常八あるぢつきの
ぢよ。ぬて八時小あ
正月のはれね　歯間
どそ。ある大振花
云。薬園八えと。ようハ

むかりうげある掛
ぬひもの　ねとれ　ケ乃うち　常
乃いもぢ　けもおひぬをすのうちよりあ
まるまるだ出る　うちぢうぬ
かをぎぬれぬひめ　こふきげあ
ぬ乃乃ぢき　ことある事なきく乃
ちいたきぢもあどあまるこちらく
あつ　ひるいとすのふしと　男の男の色
女乃受ちの　ふちくくちあやこ
おとも　男の四月中小ハむつーげる
正月乃はれね　歯間
ぢ世ものふるぬ乃のす
正月乃おれね　ぢよしれのひめまう

をかさむる事。薬師ひとりむこ。なる事六本に
わかぎをすへ一の臺よ
餅大根柳をそなへ畢
わかぎれわのひやもち先
東竪子を。る事根源
ひやもちをそなへ。
女叔母より叔母
姪大夫をとりつゝや。る事
根源云ゆもわるとりふ間侍日乃
きてをり来て供をすることれがもこれ八ら子を用ることを出て必ず位
乃もちにあるを出て続も作る物をとるべく
をもあるべし八月十二月時の秋年初の今姪竹
よをわり乃義人　節初乃今姪
と初てまりて。主上の法号より始めて
がこせ〳〵法師をつとむるこゝ。
節初をよをとりふ竹米法師
そる根源まり。延喜式義人式ナ二月
六月云ゝ又玄孫廟南北両方立所屏風其小法屏風
ゝ江次第又玉鋪小莚為節初義人座
ゝ江次第又玉鋪小莚為節初義人座

ちきよ　六月十二月乃法ごとり
よをもの義人　事乃法讀經の儀師
ありげさきゝ作れ文どもよをあげ
ゝとらうゝ　法ごとやう佛名
あゝ八法さうゝ乃形ちう

被交て初事形時ひめ初とて
ゝ。三ゝ八季
ゝ出て必ず位の位
紀朝臣　事初の今姪竹
。六月十二月時の秋年初の今姪竹
事乃をのすを法を事て。文をにきりあて
ゝて二度ゝ事て禄をふ
ふやあてゝ
ゝとりて法をとりて法をとりて
ゝ竹米法師
ゝ
ゝ

事形讀經乃儀師　事形法ごとゝ八二月と八月と百度ゝて大般若
經を四ケ月ゝ讀ゝ。江次第前書ゝ事形讀經春秋二季請百僧於南殿
讀大般若經其内定所前僧北口於所殿讀仁王經上番儀師いけしごとやう彼
法師ゝて仁王經をよむ。ゝの法おの僧を引ゝ入ゝ事初の僧。江次第五
事形讀經の所ゝ儀師ゝ所前僧入自明義仙華門ゝ。西宮記云南座
東端儀師候前居畳ゝ。畳圖初ゝ
ありけさゝ　官職便覧云延暦十三年九月三日延暦寺供養記云奉行僧
二人國儀師從儀師　始鼎赤架裟
僧のゝ。ゝ初ゝ　僧のゝ出ゝ例文ゝ
例文置上御前前入孝ゝ僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等長福
寺延暦寺等竪義者注文。近例去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名
所どゝ。ゝ僧名ゝの法ゝ。ゝ乃形完　事形法讀經ゝ事初事
の義人法師殿をかゝ。ゝ。ゝ
来とりゝ。義人ゝの法ゝ山対所をうゝ
初日行事義人奉仕御殿御仕衣束奉仕奉仕南殿紫宋ゝ。ゝ初ゝ
江次第十二云御佛名當日紫宋等架式下畳　延喜式圖書寮云御佛名装
束　御持佛一龕蒔繪紫一脚　供奉花香　金銅花盤二口。大炉一口上畳
ゝ初三ゝの佛の係二鋪十六佛名經一アてゝ

事形讀經乃儀師　事形法ごとゝ八二月と八月と百度ゝて大般若
經を四ケ月ゝ讀ゝ。江次第前書ゝ事形讀經春秋二季請百僧於南殿
讀大般若經其内定所前僧北口於所殿讀仁王經上番儀師いけしごとやう彼
法師ゝて仁王經をよむ。ゝの法おの僧を引ゝ入ゝ事初の僧。江次第五
事形讀經の所ゝ儀師ゝ所前僧入自明義仙華門ゝ。西宮記云南座
東端儀師候前居畳ゝ。畳圖初ゝ
ありけさゝ　官職便覧云延暦十三年九月三日延暦寺供養記云奉行僧
二人國儀師從儀師　始鼎赤架裟
僧のゝ。ゝ初ゝ　僧のゝ出ゝ例文ゝ
例文置上御前前入孝ゝ僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等長福
寺延暦寺等竪義者注文。近例去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名
所どゝ。ゝ僧名ゝの法ゝ。ゝ乃形完　事形法讀經ゝ事初事
の義人法師殿をかゝ。ゝ。ゝ
来とりゝ。義人ゝの法ゝ山対所をうゝ
初日行事義人奉仕御殿御仕衣束奉仕奉仕南殿紫宋ゝ。ゝ初ゝ
江次第十二云御佛名當日紫宋等架式下畳　延喜式圖書寮云御佛名装
束　御持佛一龕蒔繪紫一脚　供奉花香　金銅花盤二口。大炉一口上畳
ゝ初三ゝの佛の係二鋪十六佛名經一アてゝ

奇会注云むつきのはじめ八二
月上乃卯乃日也すりは
乃日勅使とりて近衛の
中将少将これをつとむ。
清和天皇貞観元年
十二月九日小野わらに
以勅使乃近衛は今
人とも々下をうるや。
近衛の清身也長府生
昔をこの事乃とおりと

ところのあゆみ　む月のはじめに
うづゑはなし　あせちはこゝえの
みそきあけ　節會はこいせんのうねめ
大饗の日は史生　七月のすまひ
あそひの日はいちめ笠　かをかするかりの

かんどり

ハいて又来月まつりて馬寮乃使清てるをひきて社をめぐる長者教
乃禅てる此日ひきめぐらる。江次第ニ又来月まつり乃使進
中次第ニ七条大臣家て陳列をとらひ。左右大臣各一人以龍官任之
左右大臣各一人以当番也以中将一人以府生任之をこれりのとおりと
ところをうるとしかるへし
大饗乃ところはあゆみ　二宮大饗　大臣大饗是あなれとは戒節云大臣
[illegible]の清善弟子学生とも列參して。春宮今月饗應を極とし清と朝臣
とく勝桜の縁をまうるゝ。云華根源云二宮とハ春宮中宮なりとし王門
以下本宮にまいりて拝礼のまなり。法字玄輝門乃東にて饗ありく

饗りはしく先中宮乃饗ありつゞ次ニ春宮乃饗ありつゞ二献の後ありき。按
江次第ニ東宮大饗ハあらり来る。あゆみとハ歩乃字也。江次第ニ勧学院
歩といふもあり。常ならぬ事ある事をさ学生ならの事ありをあるを云や
正月乃とうりこ　年中行事ニ云東宮ハ翌ニ童女ニ使の文も
屠蘇ハ小児よりのむ本文あれバ先院薬をそゝめさせてきこしめすや
うはえ乃わし　卯杖を奉る法師よや。卯杖のしうお注
あせち乃こゝろとれみそぎあげ　五節乃こゝろおて注。十一月丑日帳臺乃
試あり。寅日清涼殿乃試あり。江次第童女御覧あり。いづれも五節の舞姫に
天子乃御覧にならること、みそぎあげとハ五節舞妓を清むる女房くし江次第十
理髪乃とあり雲客より八髪上とあり。江次第十五節所御試あり時剋先五節
師參入着座次舞姫參上藏人頭進向長橋東禁陪従皆出入兒入者理髪
一人。童女二人薫炉筥等。下略　他乃舞をかゝつるね。下への髪上の女房ハ入る事
をゆるされて又世あれこころうる
せち会乃かれえいせんのうねめ　法陪膳とハ天子乃法給仕つかまつるなり。按御
為陪膳釆女也可被笑也下略　江次第ニ元日節會云其南置縁草墩陪膳釆
女座又云釆女撤御膳臺盤也下略七日節會云蹈歌節会も同じかりのこと。釆女八
いとしとあきき女房なれどもせち会の清そいせんのおハ采女とうるもの役
大饗の日は史生　大臣大饗ニ大路家乃史生ニ召て勸杯居飯の役をして禄
をあたうなり。江次第ニ来史生八大臣家の細事也下注[illegible]事をみるし
七月乃すまひハ　年中の事奇会注云[illegible]撲とゝるハ清涼殿乃[illegible]人めし

あつめて七月小おはぎ節といふをこゝろあひてとかたらんもをかしぬべし
そ召会せといふほどすぐしてめくれんずべきなりとすそ法華八
江次第に雲雷鳴おる間あり雲もゆきぬのけわるをうる雷うり

うりげあるる

物をとりくどきあるとうるまくよ恨しよ
人のもとにくどきあるとうるまくよ恨しよ
すくられるなること こたきぬのけあづ
うりもるあんだや。げんじ小さやくそ
験のえしねし
きをぱうちあきをさすがよ人
人はわれぬやうにあるべきをぱうちあきをさすがよ人
げあり わるもるくはるこがひする男
まうぐうをすすめ執柄ともそ物関白
人をえやとくはあるねどそれはようがり

手上言
一乃不ろう 職原抄云
執柄者必蒙一座之宣
旨故称一人又云一所
尚書人揚名あどう
近習ゆえ召つかう

いあつうう 延喜式神
名帳に稲荷神社三座。
下社大山祇。中社倉稲
魂。上社土祖神。この
神八百穀を掌り食物
稲荷とやまと由ト部
乃記なり
中乃庄社 倉稲魂と
ゆすく

極乱りうれはくーきくる
うつくれはくるる人
うつやもきさの
紐あどあるひくいこどくとし
くてこれどちあくおるで不を
よむうう法師ハとうの男と女もくる
こうとやすふすることうなれど
やうよいの乃ものとこうもあどれ
心ちあどひくみこよどち笑
うのつひこるあけあくなりあ
つくくハこうくうこやもれ
いあつうちひこてまつこうこ
中乃庄社乃れとわらく若きと

二月むつきの月　[illegible]
貫之集第一云　延喜六
年月次の屏風の歌
乃中に　二月初午の
日まうでたりしに
紙の上に
ちり山ぎの霞をれ
しらくもん

坂のぼりくだり　つるの
上の社八今の社奥十
八町ばかり山中にと[illegible]
民人八宵八月に糸
をかけ[illegible]
七度まうて　一日まうす

わんぎ〳〵のぐるわ〳〵よりぬけ[illegible]
げもあくぞとそれくくとんくくるもの
ぞ乃ぞゆきよりはきぐちてやうづる
いとうぐやす　二月むつきの初午あり　月乃曉よ
ぐ〳〵坂乃ぼり〳〵だりあゆくに八
それ時ぐりうりありよりやうく
つさんありてまこと[illegible]に信うわらぬ
人を世よりあんものをぬ去るまうでは
らんとまで減おちてやすむもとり　三十
あまりばかりある女乃はわけうぐる
以まあるを
とりはあるでぐ川をとてこるが丸れ
七度まうで去信るぐら三度ハまうでね

まうつる稲荷八七度
まうるを信心やうや拾
遺集二閑のころて
すぬハいり山七月のぼり
まうしまうんまうり

四度ハこうもあるずひつぢめて向去
ぬべしとぞよりひる人うらひて
ぐちゆきこうぞ　あるあてハめるもの
あるぐきまう乃がれぐ男よりぐ今ぞ
らぐ無やとおわ〳〵ぞ男を女ぞ師も
よきさをもちる人ぐう演ー
かみあぐうるたうぞちぐもめで
しきん　やんとあきん人乃人よかづ
きまるをとうやあ　ふくき
寄ふくよみ和のわみもまばら
出ふく人よきん人乃居およ女房て
あもしうきさつしぞぐ一ふす

よき人乃居およ
そもわ彼ふくく
人乃うやまき
ふをいう

そのおもむきのやうに
その一向おもむきをいふ
源氏柏木巻によめやう
きたなげなる筆のやうなりて。
河海云蒼頡観鳥跡
作文字 史記
かなもじわたりのならね
は後の朱雀なる云
世俗に桃ぞられせぬと
いふなりし。古今集序
にならひ河のうへのなを
は野々人のそめぐさも
ちかき作りのてまにて。
ゆゑ案するまでに難波
ばどもまでのぐちふで
けほどもめれどいふる
さびにたるべし
あまりてはたがり
彼は後なき人にれたも
うちやむさゑ人にはあまま
すそれなきなるて戯
てうちやめるなし

べきおぼせかきなどを雅も筆れ紙なの
やうなくなぐさにおんされど下手どもなる
をわざとめいて流麗たらぬ世さ語
うちやりし さやう乃すいかの乃ねをなど
り盛ぬれなかまるまなかにわたり乃とれ
くゝねを筆の志でびくかくをこれいさに
伝そで上手乃もとこそそめてまいらん
あざやかする人乃もとめまでにぶこゝま
上下わぢめてはくろうせまつるとおつ
すわてされなねさうなきわ琴
かし聞かまざさこゝいまづきさうとかれ
がやうな所しらでゆかれ うち東え

乃清めてうへ乃女房の清らさぐゆるさ
まする ごまづうそくよひおりつきに
いのれさる人 すずろうはよかならの
さいきうる中まうるよ世をさひ捨る
ひゝを

とくゆうしきさらの
まきざめむしごくまで物まで深する
人乃子あうそる男やんおとくきら回て
よき人は所まさ。恋世稲げと乃きされ
ごふきらの面り ちもく乃またつと
めて出る人乃おるべきおもとまる面
ろし おりふ人乃おこせつる文

三昧にいふ 河海云三昧ハ
梵語也此ニ云正受又名
正定云云法華三昧又念仏
三昧などいひて他すがく
まぢりのみちけをまつ
をいふ也堂を三昧
堂といふ也
とくゆうしき
あく夜まもりしくきろ
まうしきなし
すまきざめむしごくまで
その 案深 村濃 括括。
くりまうし源氏閣屋巻を
うしろまづめとかう物
まへしへてもしとは
物かひてひし
ぢもくのかずつとめて
驟召除目の翌日をいふ
そりうて
心ゆへかゝるべき 知命
心受爲もとつき年ハその
おるるともくなりてきまし

とみの物ぬひとハ
物の急ぎ也 近き時ハさ
りぬべき物縫せさ
居いりて 物見の所へ
入居るも

事なりけり 出て入
参るの物見ある時節に
臨むる也 深成葬礼に
物見に行んとせしに
ども事なりぬとて行べく
ハ物にて

白きしもとゝ 警固の白杖
をもて 車も 笞ハ犯人
をうつ杖なり

こゝろもとなき物
人のもとにとみの物ぬひにやりて
待れど物見に急ぎ出て今や〳〵と
くるしう居いりてあなたをまもらへ
たる心ち 子うむべき人のそのほどすぐるまで
さるけしきもなき 遠き所より思ふ人
の文をえて かたく封じたる續飯など
あくるほど いと心もとなし 物見におそく
出て事なりにけり 白きしもとなど見付
たるに ちかくやりよするほど わびしう
おりてもいぬべき心ちこそすれ しられじと思ふ人
のあるに まへなる人にをしへて物いはせたる

我をる事をしらさんとおもふ人のある所に我ハ
隠れ居て おまへなる人に
我ある所をしらせじと思ふ事を
ていはせさせ 我を
これらも
人のきくにおふる人
に物いはせてきこゆる
ことさまり

ありぬべき所をとらへて
我ハ糸付べき針をと
らへて人にやとひ
てつけさする
これもいそげばにや
やとかく 今も気を
せきゆへにや 頼て
とえつけぬ
只今をこせんとて
まうけし車を進付
さきんとてのりく出し
おかしつきをるを
彼車の帰るを待て他
の車にて所をゆくさ

いつしかとまち出たるちごの五十日百日などの
ほどになりたる 行末いと心もとなし
とみの物ぬふに なまくらうて針に糸つ
くる されどそれはさる物にてありぬべき
所をとらへて人につけさするに それも
いそげばにやあらん とみにもえさし入れ
ぬを いで只なすげそといふを さすがに
などてかと思ひがほにえさらぬは にく
さへそひぬ なにごとにもあれ いそぎて
物へゆくべき折に まづわがさるべき所へゆ
くとて 只今をこせんとて出ぬる車
まつほどこそ いと心もとなけれ 大路ゆき

とみよりずみなとす
薫炭也ぽきた乏り炭へとお
こすみぐわらうぬる経
の名しく心をとゞきえ
けさうべからずハさしを
飽也人ハ乃西香ハ継
を摘ちんせて来く
まだをれハさものずほど
なれど又自然のて言

なる人乃あるゝまゝによろこびなれバ
わざありいぬることは知れずして物見ぬ
いでんとてあるまゝ車ハありぬんなど
いふときくこそ憎けれ　そうなる
人のちれとえしき　物見やの前
なるまでおりぬころもれいあるべき
人をのせりいきなる車さしよせさ
てるぞどみちのしでおとすもいと
心をとめくらすすてをもいぬべきやち
する　とみよりずみやうさいとびさし
人の寄のみしとくすべきぞえみなぬ
かしこと心をとすしげきうべからハさしも

わとわりしと
こきのみゝうやし
口ときしのみゝう規模
なくめしとひてなき
よみわれハひとるすを
出きゆしく
すれぞくるの　松陰黒
待蘭黒ゐ侍ぞ
故殿の清ふくの比
中関白殿長徳元年四月
十日薨。服忌令ニ云父母服
一年。暇五十日ミミ。
六月卅日の祓をとく
定子乃後よ出のまべ
きとし後ハ触穢なるも
何のべきさ年中行事
なれつゝされおはする
太政官廰乃おきし所

いくおぼえれどもつゞく文作るべきわを
おりぽえまて女も男もしらずよひらすす
かどはときのみゝうはとぞおもひすぼあい
なくひが車を出さするかりしえこてちぬ
ちくぬれうろきさぞ我乃ぬるよ川
ことぞうう心をとあされよ川ぞぐる
めのひるがりも心をとあし
故殿乃清ふくのころ六月卅日の祓をと
いふ事に出させ給ふべきを職の清さうしハ
方あしとて官の司の朝所にわたらせ給
まのよさりあつくわりなきやみにて
わりなきやみをくはすとせばくおぼつかなく

へ波(?)などハあつさんもとハ
名所なりや

時はかるまで　禁中の漏剋博士のこと。百寮訓要抄。漏剋博士ハ漏をつかさどる。昼夜の時を伺ひ漏水のうつるをもつて時をさだむる職也。職員令云。漏剋博士二人掌率守辰丁伺漏剋之節。守辰丁廿人掌伺漏剋之節以時撃鐘鼓。

うきやうりのをり
新古今　高き屋にのぼりて見れハ煙立民のかまどハにぎはひにけり　仁徳天皇
東野州説云　うきやハ樹図などのこと

かきなへふかきさ更にもれいりやうよかりしかど
ともなく見めぐりくみとゞりとぞうけさる。四方の御簾かゝげ
けしきゞしきかりし女房達まゐりかしこにて
なごぶぜんざいりハくりんざうさて出よとます架垣
ゆひくいとおかしくうでかゝる。花さいやうふおさやかし
かさなりく咲さるものぐしきさもおのせん大政官の歴ゝゝかね何事とし
ざいりハよしは時ばかるまでハてかさなら
まくおねの声をれいりハ似るどさこゆ守辰丁のうけ時の接
をゆしかりてわかき人ゞ二十餘人ぞくね女房達千寿
あるよゆきくすとあり。うきやのの
あかるをこれかれ見おくれぶうとめびのと落纏裳唐衣みな
かしきぬおそがゝさのひとへがさね。花の稚ど

そのおきかまちハ株図(?)上の
あかさきれて八株図上て
ざうし人々ぐてまぜれば
なき女房にまじりて
わらびありくし
右近陣　月華門を立
て拾芥にあり
上達部のつきかひし
者の着座するところ
し女房のゐるまの名
なるべし
上　政官ゟ太政官の
官人兵少納言に記

ともさくのをりなる時に天人
あるらえふやまぶれど。らくおわ
さるかやいろ見ゆる。おちのわさあ
まどかおけられさる人いえずらで。
うらやましけよえおけさらも。ちかし日
薫りくまぎれまうぶさる人こ
こよさちまじすて。右近乃ぢんへ扱
見子出きてうれさつきわきとも
あめらしをおうハせね事也上達部へ
乃つきのひしすとよ。女房どものかわ
上卿達乃かある障子を皆うちと
なしうこあひさわるぞくるしげる

ゑくさそのこと
かゝきあられハしらえと法華経ノ
譬喩品乃長者乃大宅
久しくあれく蜈蚣蚰蜒
守宮百足なぞの諸悪虫
交横馳走せしあるさお
かひくかゝる事ー
太政官の地のいまやうの
やうハ八講などやぶれ
古き序文などのあるる
へし 追考
かくすしろ無風の
六月より初秋までこ
ゐ御文のおほせしうや
古今二 文と
気の通なりくく涼さ
くせやかくらん いそさと

こゑもあれどきこえいれず。屋乃いと
ふるくてかはらぶきなればにやあらん。
あつさ乃世にしらねば、みかど乃とにふしたるも
ふるき所なれば、むかでといふ
物、日ひと日おちかゝり、はちのすのおほきにて
つきあつまりたるなどぞいと
おそろしき。殿上人日ごとにまゐり。夜も
ゐあかしてものいふをきゝて、あにはかりきや
太政官乃地のいまやうのよるありきならん
事をとずし出たりしこそをかしかりしか。
秋になりたれど、かたへだにすゞしからぬ風
の所がらなめり。さすがに虫の声など

とうけく牽牛を云と
七夕まつりなく
八月ニ還清乃おの
夜七夕乞巧奠乃
事に清身まわり
宰相中将斉信
長徳二年四月廿四日参議
恒徳公乃三男
のちに中将 宣方
六条左大臣重信公息
人間の四月をこう
白氏文集十六云
大林寺桃花
人間四月芳菲尽 山寺ノ
桃花始盛開 長恨春
帰無覓処 不知転入
此中来 とふ此詩これは
くせそく、四月廿日
あすハかゝる詩をさと
えそへるべし

きこえけり。八月ぞかへらせ給へバ。七夕
まつりなどにて例よりもちかう見ゆる
は、ほどのせばければなめり。
宰相中将、たゞのぶ、のぶかたの中将と
まゐりたるに、人ごとに物などいふに。
ついでもなく、あすハいかなる詩を
のといへば、いさゝかおもひめぐらしとゞ
こほりもなく、人間の四月をこそは
といらへ給へるが、いみじうをかしきこそ
すぎにたる事なれど、心えていふはをかしき
中にも女などこそさやう乃物
わすれはせね。男はさもあらず、よみたる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月ごろつもりて[illegible]
月ごろ[illegible]と[illegible]
[illegible]

我[illegible]
[illegible]
[illegible]

妖信乃家ハ閑の成
こゝひゝ事と云ものゝ
しを國ぶり
詩とて
妖信の朗詠よく志
のひゝに上手なれば
芳のやうなるまうの
いでゝ
せうとて
朗詠云蕭會譽之過古廣詫締異代之交元朝綱の交友乃序のこと公卿乃大守蕭氏吳の手れが賢を志ひて廣ゐ
いとゝ三十のこゝろ
未逮三十期に古稀の
なるとも
今文

いとゝ
おもゝ
ものを
みも
宰相
ほかの
しゝ
ほかの
をゝ
ほかの
ほかの
ほかの

[illegible]
[illegible]
[illegible]

前漢書六十四に朱買臣が傳あり。くはしくは注に
しるしたり。
仏徴殿女院義子乃
至尊院兩院太政大臣公孝
公乃ちもとめ一条院
乃女房に
侍るのおもて　宿直也
侍るあはせ　中文に
天子のもとかくれ
さるべきかの女房を
侍るものあくしい
まれば物くして休
たるうちもさまた
うちもやもむ天の
彼らうかがむとめ左衛
門と云ふ人なり

そもそも列侯
こゝさでんと八雨院乃太政大臣乃女房ごと
きこゆる。きはうちもみとい
ものしむとめ左衛門
乃女房と
人わ
ア
べれどさべきさまう女房ちとて
あるとねいとえばくをろうよさま
ぶまめうけつひるんまでいひぬひ
はれぬ人ごぶまでよ。まうとう
人いうちもやもむ天乃あるこうとけ

すでに物きこゆ
さくとこの今
侍るハロさぐあず
我方人とあう
みと
人のひかるさま
うちうちのふ
世の人もいとつひる
すふうれとなるあ
うり侍るの元ものい
あるこうと

侍るべきすもるきを
侍るの沼うハ文う
ゆとむるもものきう
うとみのふ物はよう
ものうめと恨と服
立をれとうとうと
そもものつせのふ
侍るのとつています

まつさるほうりみてもぐくまうさ
まふあるを物をさいくいうとて。
宣方の侍
すぐく物きてどかうべとあるき
これば人乃いひかるさまよ元
宣方のまま
あるまでいつくうまめぐらく
ほかのこうかれてい
うみまおもはやいうあるをと
侍宣方の侍
クきこうるぞうゆうとめのつす
侍宣方の女房まほかのいたとと
あるいふうとうあるを人をひき
侍宣の侍
ゆるうせぐ侍べきこうもあきをれて
をわ出侍ぞ面こうはあとて宣やり
てわつよそしうのいつせまふあん
侍ほかのこうこと
とあるとなる人申宣よさやう

みとのぶてふ
みすまし

殿上人のわらはして殿上人しばしやすらひて笑ふ殿又侍がよばせてみをつひやしとさていひちらを恨し殿上人も笑ふとうべ侍が一人ばかりこそふべきみあるべきもあやもくかちのまくもうしろめたしもうしろめたしと昔は侍はるもぐ不用之成ぐうしをうぐんぐりのまくも

繧繝縁畳

のすをあんいひ侍ぬ人のつぐよみすきをとこいひくひきうみ
ぐにほうも牧人よちかすき来云
はるるとうくて殿上人乃わくふ
さていひ出るありとのへいさていひちをうくみのべくとあくごめる。
あやしまぐいへいるのちへさてや
みるひうきわ
むうしあがてふうある柏
うぐんべるれさみ乃ありてわ出
きるかくと乃屏風のかてうこ
あれくく菊ひうるる松のま

ちまちの柏　白き絹
又花四ちれこんきを
すりくも
ぐの月てき
侍上侍所侍虫二変
あるへ
ちひうめのちひうう
蒲陶染薬紫宮家
ハ桂の灰をさす柏
あれハぐちれさめさ
れを灰てとうて
ほかまあまあて
誰方てくろ柏もお
きをかてめう
表れくう　和離
六位のうちとろき
ふもさハ表れ暴進乃
形もあれどもくるハ
ものをーげあきと
人のすうぐよ人

かれくる　ぢれ切乃柏れとうくる　ぢれやうくき　きちやう乃くびくのふ
アめる　帽額　とかう乃ちあくちうぬる　古人の
ぢくうの柏あくちうくる　ちびうめのちう
柏れちひうくる　きごのれをくび
をれくる　白き家乃まぐちやけくる
池ぐいさふぐ　あれどうきまふ
ちぐうく
くのをーげあきとの
ぐてくて人とれうちあるむこれよ
れわちある　六位乃から志ろきえ
ことする人乃さまよ人乃すあうわふ

のすと清たてを
まを成就ちんとす
るさの心

経ハ不断経

ゆむしゆもやぎきの
ゆうぐきを学也

えれりのちり
ちぐ春日八幡ぐ
をを示とぎ儀式ハ
宮中ゐてあれば近く
てをきあぐし
うすのつらかり
九れ月つくラリ今鞭る
う七断とりよるこ近き
をとまりのれいきを
也

ごくらく　阿弥陀経ニ西方過十万億佛土有世界名極樂と読きぞ
阿弥陀佛　去此不遠ともと名るぞあぐし
舟乃うち　二四十里乃ゐも風ときハ一日一夜もゆくやう

大事うけ　一書よかりもぐ六
六七八十ある人乃こちあうきく月
ごろうきありぬる風吹るかあぐる
ね　経しかぐんぎやう
ちくてこをきね
えれ乃ゆまりなをぬりかう
く乃中　くるれつぐらかうと
ちうきの晦日む月一日のかぐ
をくてちうきね

ごくらく　舟乃乃　男女乃中

男女乃中　男八陽共八作ぐぐとあるを西方の浄土ぐ。夫婦会釋の浄土ぐて近
ありうのれ井　武蔵
山乃井さしも聞き
万葉　武蔵国入間郡
ゆる山のの九歳ぎ
我ゆうちうま　大宿
沙ハ歳ぐ人を
地乃ハとを陸奥
れあうとあう

あするゆもひを
俗ぐ系　飛名井ハ若
ハけぐ　ぐ
もひを　ーーーー
もうー　飛名井
みちくさハるを也。一説　飛名井八

せうたやうね　ヤ將井とち鳥丸の東
榛井　山城ぐ子所の近也。往宵乃小結法の回ぐある
きぐきまちのね　左町八常寧殿ぐ乃南と拾芥ぐあう
み貴の井　八宅にちぬきのみとあう
受紙八　お月のを

井八　走井近ぐ
ありとのれ　武蔵
しき　山乃ねさを清きさめう
ありとうしあうんあする井をひも
さもとわかるうかうれ　むの
井　せうたやう井　榛井　き
乃きまちの井　み貴のね
受紙也

紀伊国　上国は従五位下也　中国は正六位下也　下国は従六位下也　大国は従五位上也

紀伊国　和泉

やどりの乃つかさの掾　環翠抄　舟橋流之位の職　原抄の私抄云宿官とハ官不記なりの又位上てるゝ。

下野　甲斐　越後　飛騨　伯耆

但ハ。これハ友を有す所也。職員令云掾守者近代多是遥授也。環翠抄云遥授とハなりゝ不ゝ所也。これ遥授の国ハ四位又位の者也。又曰掾ハ地下の又位ハ位これなり但ハ。又其乃隙国の時番後雲客なるもこれ別也。

下野　甲斐　越後　とゝ位ハ上国中国ハ大国と上国ハ掾なるあり。中下国ハ掾なるなり。此等国の乃又ケ国ハ皆上国掾なり

大史　侍の叙爵せを大史とゝ。隙翠云八省乃丞なる属ハ府あり。又位なる成る時中務大史式ア大史なるを侍乃百日也。

式ア大史　式ア丞　相当ハ位なると又位なり叙なり。叙爵なるを式ア大史とゝなり

大史　大史ハ

武部大史　なるべき事なり。すうかたわた

ゆ乃ゝ掾のなるなと人の

大史の大史　史大史　六位殿人

叙爵なるを式ア大史とゝなり

大史　大史ハ正六位上也　又位なり叙爵なるを式ア大史とゝなり　史大史とゝなり

板屋せをぎき家　小板屋　車やどりのやうなる所

あどなる　近く　まかり　牛はなる

かせて　芝まかせてするなる　いとみ芝

まを　庭いとときなる　けみなる　布陸奥

いとすかけ　わたなる　ぬの陸奥

住居なる。なるハ門つくさせなる

とゝあひ　ひなる　みぐるま　ひたきあ

心ばきあり　おや乃家　主　皇乃家ハ主文

ありゝ　俱文　あはあのすもぬ

さなる　乃あなん　助宗　のぼる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろく今やゆくもの
人ゆくひとのかれこゝろを
ひつてかれ門をぞの
あはゆくるやとこのぞき
うぐひすくぞの仕人乃
わかのてまわぎする

ぞとゆくるゆくもの
ゆくるゆくもの
ゆくるゆくもの

あやうきこゝろ
ゆくるゆくもの

させぱごろにぬとべてゆくるわぎていひ
るぱくもむかりうぱきくべくぱるわぱ
人乃ともあるとのぐも。ゆくこゝろ今やゆくもと
こもどちのぐきてくるきゆくるゆくもの
とかくべくやうぱねるするもきくてゆ
ぱくべくぱきよひとのめんとゆくるゆ
やするぱくれどすくよるゆくるゆくるゆ
けぬぱ門ゆくるとひてぬるゆ
あるとぱくるゆくもこゝろ心ぱくこゝろとゆくるゆ
あるとあるゆくもあるゆくもゆくもゆくも

人のうへをもいひ舞ひ
ねぶりれぬれば
人の上とうわ
舞ひ
人のうへをもいひ

くれぬれば明けぬるものとて
あるじ（主）
ぬれば
ぬれば
ぬれば

あけぐれのそら
昧爽 文選 [illegible]
きりてくもる
雪はの山うつくしく
曉入梁王之苑雪滿
群山 謝觀 自賦の行
朗詠 [illegible] 孝至
八漢文帝の時 [illegible]
[illegible] 雪あるし
鄭生校書 [illegible]
あそびのひしゝす文選
の詩 [illegible]
村上の御時　六十二代天
暦のころ
雪月花の所
朗詠 琴詩酒伴皆抛
我雪月花時家憶君
[illegible] 文集 [illegible]
殿 [illegible] 律を [illegible]

あけぐれのそらのきよきまでうつくしく
ぬれどうちくもりもとやとりつるもあらず
ぶねのもとやとりつるもあらず
はの山うつくしくあけぐれのそらのきよきまでうつくしく雪
うきはもぬ [illegible] 青はうすくてはの色
かさぶるもの [illegible] 屏風
すぎくるあるとき雨あがりをりひ合せる 楊器
村上の御時雪のいとうつくしう降りたるとぞ
きこしめして梅の花を折て [illegible]
[illegible] 誰 [illegible] 小弁
[illegible] 義人 [illegible] 清名
[illegible] 雪月

憶君 [illegible]
今の [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
紫双紙 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

宣旨こと人八優ゆ
やさしくうらとめで
たうわ名ぞ大夫ぬ
女房也　法師堂の中姫
三条院の法付宣旨文
ゆゆしくうらが女房と
思業は拾遺集に作
者大和宣旨と同人
なれども作者部類に
中納言惟仲女三条院

わらはとなりにけるとぼくそ
みぢ（磐也ひんうゆゆ）ゆしさうぞくあどうるつくし
てぞ名をくらべ（たたえへうた）
あきらかなりとかきけるうたをこ
そいらぐ（法鏡也ちりしとく）うせるせのうしろ

皇太宮女房大和也義忠卿妻之娘号大和

春曙抄八終